

### 『ハロルドとモード／少年は虹を渡る』

1971 年／アメリカ／ハル・アシュビー監督作品

アメリカで出会った風変わりな秀作  
嬉しく切ない気持ちがよみがえる

会員 中村 千之 (48 期)

『ハロルドとモード／少年は虹を渡る』  
発売元：パラマウント ジャパン  
価 格：1,429 円＋税 発売中



私がこの映画を初めて見たのは33年前の16歳の時だ。

私は子どもの頃、横浜の本牧に住んでいた。当時、小学校の行き帰り、フェンス越しに米軍家族居住区の青々とした芝生、大きな白い家々を眺めては、自然とアメリカ人の生活に憧れていった。小学校5、6年生の先輩たちの中には、関係者以外入場禁止の敷地に自転車でわざと入り、MP（ミリタリーポリス）に追いかけられながら走り去るという難技を楽しんでいた者もいた。私は1人では怖くて絶対にできなかったが、そういう強者に後から付いて行って昂揚感を分けてもらった。

その後、父を説得し、叔母が移り住んだカリフォルニアに高校生になって留学した。ある日、叔母の家で同居していた大学生の従兄が、思うように友人ができない私を見かねたのか、サンフランシスコのダウンタウンにある映画館に連れて行ってくれた。その映画館は、日中は普通の新作映画を上映するが、夜はオーナー好みの秀作映画を上映するような粋な映画館だった。従兄と見た『ハロルドとモード』はまさにその夜の1本だった。姉と妹はいるが男兄弟がいなかった私は、年上の従兄と映画を見に来たことが素直に嬉しくて、また、随分と風変わりな内容の映画に「こんな変な映画が上映されていて、やっぱりアメリカはすごい！」と勝手に浮かれていた。

この映画は、裕福だが虚飾に満ちた生活を送っている母親の愛情を求め、奇行に走る少年ハロルドと、

収容所にいた過去を持つ老女モードの出会いと別れを軸に、自由や反戦、権威や常識に対する批判精神、主体的に生きることの大切さを皮肉とユーモアたっぷりに表現している。

同様のテーマを扱った映画はほかにもあるが、ハロルドとモードの奇行の可笑しさと、それを引き起こす2人の気持ちの背景を思うと胸に迫るものがあり、40年以上も前の映画とは思えないほど、現代でも考えさせられるテーマがそこにある。

アメリカ人の友人に聞いたところ、アメリカでも現代的な名前や古風な名前があるそうで、「ハロルド」は年長者を、「モード」は若々しい雰囲気を感じさせるということだから、そこにも制作者の意図があるようだ。

このコラムを書くにあたり、久しぶりにこのDVDを借りて見た。日本の着物のようなガウンを着てハロルドとモードが水パイプを吸いながら、人生の意味を語り合うシーンは印象的だ。「人が互に関心を持ち思いやることの大切さ」、「主体的に判断し行動することなくして人生の充実感はいわねないこと」、「それが自立につながることを」、この映画は再認識させてくれた。

以前、自分が若くてよく理解できなかったシーンも、年を重ねて見ると理解できるようになっており、自分の年齢と感じ方の変化に苦笑してしまった。

大学生でカッコよかった従兄は、今では恰幅のいい税務署職員としてサクラメントで活躍している。あの映画館はもうないだろうが、この映画を見るたびに、あの時の嬉しくて、でも少し切ない気持ちを思い出す。